

本の万華鏡

環境先進国日本

地球を救う日本の技術力

長谷川慶太郎著

東洋経済新報社 二〇〇〇年

推薦者

鷲田 小彌太
(わしだ・こやた)

札幌大学教授 一九四二年北海道札幌市生まれ。大阪大学文学部哲学科卒業。同大学院文学研究科博士課程修了。三重短期大学教授を経て、八三年から現職(哲学・倫理学)。哲学こそ森羅万象を対象にする雑学。好奇心・教養の学であるという立場を貫き、哲学をわかりやすい語り口で伝えると同時に、評論活動も精力的にこなす。著書は、哲学を知ると何がかわるか(講談社文庫、一九九七年)、考える力の冒険(PHP研究所、一九九四年)など。

環境・エネルギーに関する最良の図書といえ、躊躇なくあげたいのが、長谷川慶太郎著の『環境先進国日本』(東洋経済新報社、二〇〇〇年)で、副題は「地球を救う日本の技術力」です。

二一世紀の人類共通の課題は、経済成長を持続させながら、地球環境の保全を達成することです。しかし、欧米諸国さえ、総論賛成、各論反対。これが著者の立脚点です。たとえば車の排ガス規制をめぐる京都議定書の批准を拒んだのはアメリカで、日本の車メーカーだけが規制基準をクリアする低燃費車の量産技術に成功しています。

石油ショックの打撃が日本を省エネ技術の開発に駆り立て、世界経済の最前線に立たせた、と主張して論壇に登場した著者は、つねに技術開発とエネルギー問題をリンクさせ、政治経済文化問題を論じ、環境保全問題、省エネ問題を中心課題に掲げてきました。

著者年々の言葉である、世界が日本に倣うとき「は環境保全技術にもどんぴしゃり当てはまります。いえ、環境保全技術といっても、高度産業技術の開発なしには、空文句なのです。生活水準を落とさずに環境を保全する、という課題に正面からチャレンジしてきたのが日本の企業でした。たとえば、廃棄物「新資源」の技術開発であり、実用化です。それを可能にするのが家庭「ゴミ」(廃棄物)の選別です。かくして環境保全が生活革命に直結するのです。

現在、環境保全で日本最大の緊急問題は、隣国中国の環境(資源)破壊です。垂れ流しの中国産「公害」が海を越えて日本に押し寄せています。この解消には、日本の環境保全技術の提供(有償・無償)以外に手はありません。

この日本の環境保全技術を支えているのは、民間企業の研究開発投資です。日米の研究開発の官民総額はほぼ同じですが、民間ベースでは日本が断然圧倒しているのです。

以上の論述に支えられた環境問題の第一テキストともいって本書は、しかし広く知られてはいません。環境保全超先進国日本の損失の一つではないでしょうか。



from editor's room — CEL編集部が推薦する参考図書 —

- 『市民のための環境学入門』安井至 丸善(1998年)
- 『だれでもできるごみダイエット—わが家のごみ徹底減量法』崎田裕子 合同出版(1999年)
- 『私のエネルギー論』池内了 文藝春秋(2000年)
- 『生活と環境の人間学—生活・環境知を考える』長嶋俊介(京都)昭和堂(2000年)
- 『21世紀のエコロジー社会—エネルギー・経済・環境政策・教育』エコロジー社会構築研究会編 七つ森書館(2001年)
- 『環境と文明の世界史—人類史20万の興亡を環境史から学ぶ』石弘之・安田喜恵・湯浅超男 洋泉社(2001年)
- 『わが家をエコ住宅に—環境に配慮した住宅改修と暮らし』濱恵介 学芸出版社(2002年)
- 『調べてみようエネルギーのいま・未来』槌屋治紀 岩波書店(2003年)
- 『生活環境入門—ライフスタイルの変革へのヒント』石沢清史 リサイクル文化社(2003年)
- 『エコライフ&スローライフを実現する楽しい非電化』藤村靖之 洋泉社(2004年)
- 『ごみ問題とライフスタイル—こんな暮らしは続かない』高月紘 日本評論社(2004年)
- 『環境社会学—生活者の立場から考える』鳥越皓之 東京大学出版会(2004年)
- 『人間・環境・安全—くらしの安全科学』及川紀久雄・北野大 共立出版(2005年)
- 『エコライフのすすめ—どちらの生活を選びますか?』東京大学システム創成学科実現型プロジェクトエコデザインメンバー編集 丸善(2005年)
- 『京都議定書目標達成計画』日本国政府(2005年)
- 『STOP THE 温暖化 2005』環境省(2005年)
- 『地球温暖化対策に関する世論調査』内閣府(2005年)
- 『「満足社会」をデザインする第3のモノサシ』大橋照枝 ダイアモンド社(2005年)
- 『Lohas/book』木楽舎(2005年)
- 『これからのエネルギーと環境—水・風・熱の有効利用』松下潤・里澤俊雄・君島直仁 社立出版(2005年)